

## 夢に向かって多様な若手が集う消化器内科

消化器病の臨床研究、基礎研究、トランスレーショナル研究に集う、多様性に富んだ、多くの若い医師、研究者が夢を追う毎日

金井隆典

医学部 教授

消化器内科教室の根本テーマは、「夢をつかむ」です。急速な医学の進歩に伴い、ますます細分化される医療の中で、消化器内科は、腹痛、下痢、便秘、胸やけ、吐き気など、ごくありふれた症状の患者さんを診るため、守備範囲は実に広く、慶應義塾大学病院では最大の外来患者数を誇る診療科です。若い人たちは医学部卒業後、初期研修医と専修医コースを通じて一人前の医師となっていくわけですが、慶應の若手医師は、卒業数年もすると自然と研究をやってみたいと感じるようです。おそらく、学生時代、初期研修医と専修医時代を通じて、慶應伝統の「半学半教」の精神で、常に自ら考え、仲間や後輩とともに活発に議論しながら成長し、いつしか、知られざる生命の神秘や病態の解明、新規治療法の開発に挑戦してみたいと考えるようです。毎年、10人ほどは博士課程の学生を受け入れています。彼らの夢は実に多様です。消化器内科では幹細胞研究、免疫学、末梢神経学、腸内細菌学、内視鏡開発などの研究を行っています。最近では、AI研究、遺伝子編集研究などの領域に挑戦する者もいます。また、消化器内科には、研究領域だけでなく、実に多様な人々が集まっています。出身大学は常に20を超え、時には当教室の基礎研究に参加したいと修士課程の学生も来てくれます。若手医師のほとんどは将来、素晴らしい臨床医として大成していくので、教室では研究の根幹には「患者のため」という共通の理念が浸透しています。いつも若い人には、「この研究はどういう臨床的な意義があるの?」と聞いています。最近の若い人は何となく内向きで夢が短絡的だと言われます。しかし、当教室の大学院生は大きな夢に向かって、文字通りそれぞれが夢中になっています。私は若手の研究には、たまに「すごいね!」と言いたい。「どこがすごい?」と言って、皆を大きく揺さぶりながら彼らには大きく世界に羽ばたく人材に育ってもらいたいです。彼らの夢の地ならしが私の生き甲斐です。

### 臨床へ応用還元できる研究を目指して

おおのけいこ

大野恵子君 医学研究科博士課程3年

消化器内科は消化管から肝胆膵領域まで幅広い疾患を扱う診療科です。当教室は「多様性」を特徴としており、多様な疾患領域の中から興味を持つ分野の基礎研究・臨床研究に没頭することができます。基礎研究では、腸管・肝免疫と腸内細菌・代謝物との関連など、スタッフの指導を受けながら自分のテーマを探究し、臨床研究では、実際自らが携わっていく形で疾患を専門的に学び、臨床研究のノウハウを学ぶことができます。一人ひとりに研究テーマがある中で、研究班全体で先輩後輩を交えて一緒に実験を行うので、結果を出せたときの達成感はひとしおであり、グループ全体の士気が上がる瞬間だと感じています。



# 朝鮮民族を知り、世界を知る、日本を知る

たかぎ たけや  
**高木丈也**

総合政策学部 専任講師

これからは、教科書や本に書かれた情報だけを信じていれば物事が解決できる時代ではありません。予測不能な時代だからこそ、私たちはフィールドに立ち、事実を見極めることを大切にしています。

湘南藤沢キャンパス（SFC）で開講されている高木丈也研究会のタイトルは「朝鮮の社会と文化」です。自身の専門は社会言語学なのですが、学生の研究テーマは特にこれに限定せず「朝鮮学」（Koreanology）を志す学生を広く受け入れています。ですから、学生の興味・関心は、言語教育、方言イメージ、多義語、アイデンティティといったものから、都市計画、芸能、美術、服飾、スポーツ、伝統婚礼……と多岐にわたります。韓国・朝鮮と関わって20年選手の私にとっても毎回新たな発見が多く、まさに福澤先生の「半学半教」という言葉を噛み締めずにはいられません。

私の研究会の特色のひとつとして、フィールドワークを重視しているというところが挙げられます。韓流ブーム以降、特に韓国については、数え切れないほどの情報が流布するようになりました。もちろん、「近くて遠い国」だった韓国が本当に身近な国になったということは歓迎すべきことです。しかし、その一方で膨大な情報の中には誤ったものも多く含まれているという点に気づいている人は案外、多くはないようです。事実とそうでないものを峻別し、自己の主張を展開するには、ネットや本の情報だけでは決定的に足りません。自ら歩き、目で見て、人と対話することでは得られない「何か」があるからです。幸い、韓国は日本のすぐ隣にあり、朝鮮語話者は我々の身近にいます。ですから、本研究会の学生は、全員が学期中に最低1回、独自の調査に出かけます。若い今だからこそ豊かな感性で本当の世界を見て、それを正しい言葉で伝えてほしい——この研究会はそういう訓練の場でもあり、実践の場でもあるのです。

この研究会で積み重ねた小さな実践は、いずれSFCから日本に広がり、この国における隣国観を変える潜在力を持つています。こんな時代だからこそ「地に足を着けて」向き合うこと。それがいかに大事かを私も学生たちとの議論から学んでいます。

## 思い込みを捨て、目で見て考える

あきやひろか

秋谷祥加君 総合政策学部4年

私たち高木研究会では「韓国・朝鮮」を軸に、それぞれが興味のあるものをテーマに掲げ研究に励んでいます。韓国の音楽・スポーツ・美術・言語などさまざまな分野の知識を得ることができ、自分の研究の幅も広がります。年に一度、韓国でフィールドワークも実施しており、2016年度はソウルを訪れました。2016年度のフィールドワークでは、安山市にある朝鮮族の老人ホームを訪ね、朝鮮族に関する理解を深めることができました。このように、机上で韓国・朝鮮を知るだけでなく、目で見て学ぶフィールドワークも大切にしているのがこの研究会の特徴です。韓国・中国と多国籍な仲間も多く、アットホームな雰囲気、楽しい研究会です。

